



Title	博士留学生を対象としたオンデマンド日本語コース「基礎日本語能力開発プログラム」(BJDP): プログラム実施の背景と実施報告
Author(s)	山畑, 倫志
Citation	日本語・国際教育研究紀要, 27, 95-109
Issue Date	2024-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92234
Type	bulletin (article)
File Information	27_p95.pdf



[Instructions for use](#)

博士留学生を対象としたオンデマンド日本語コース 「基礎日本語能力開発プログラム」(BJDP)

－プログラム実施の背景と実施報告－

山 畑 倫 志

要 旨

本報告は2022年度10月から2023年度にかけての「基礎日本語能力開発プログラム」(Basic Japanese Development Program) にもとづく「オンデマンド日本語コース」の実践報告である。「基礎日本語能力開発プログラム」は北海道大学において博士課程に在籍する留学生を対象とした日本語学習のためのプログラムである。しかし、北海道大学には在籍する留学生であれば受講資格のある「一般日本語コース」がすでに実施されている。ただし、「一般日本語コース」は正規の授業開講時間である8時45分から18時までの時間帯で週当たり二回から三回実施され、なおかつ授業形態は対面、あるいはリアルタイムのオンラインである。そのため、日中の時間帯に授業を受けるだけの時間を確保できない学生、特に研究室内での研究時間が大部分を占める博士学生の中には「一般日本語コース」を受講できない者もいる。そういった博士課程留学生を対象としてオンデマンド教材を中心とした学習の補助を行うのが本プログラムの趣旨である。本稿ではコース設置の背景と、実際のコースにおける取り組み、そして受講生や日本人協力者からのプログラムに対する反応について報告する。

〔キーワード〕 博士留学生、オンデマンド教材、日本語学習支援、学生間交流、留学生就職支援

1. 博士人材のキャリアパスの拡充と外国人留学生の日本定着促進

ここでは、本プログラムの背景となる博士課程留学生（以下、博士留学生）の置かれた現状と、それに対する文部科学省の対策や方針について述べる。

まず、日本人学生を含めた博士課程を修了した後のキャリアパスについ

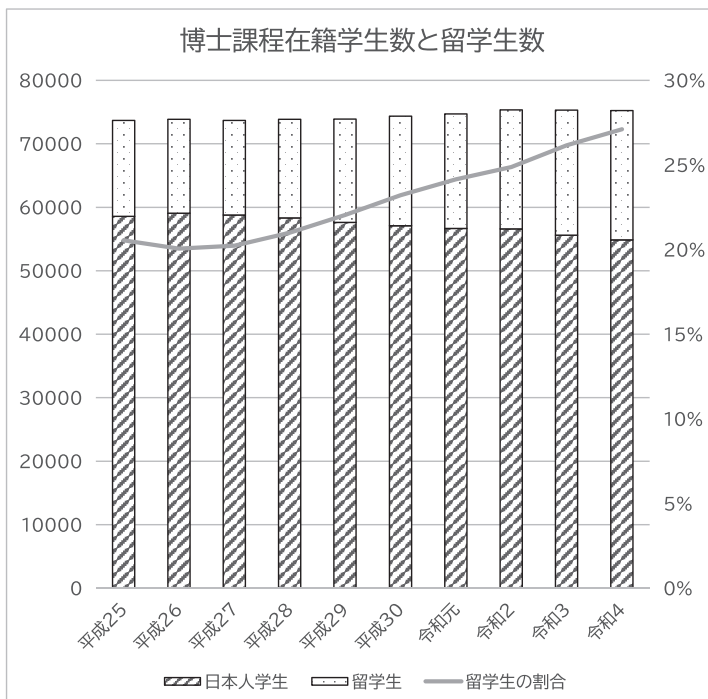


図1 国内の博士課程に在籍する学生数と留学生数
(文部科学省『学校基本調査』平成26年度～令和5年度を加工して作成)

ては、研究職や技術職以外の多様な職種も選択肢となることによる専門知識や技術の社会への還元促進が以前より謳われてきた。その結果、近年徐々に博士人材の修了後の進路に幅が出てきているが、文部科学省(2019)では、2018年度には理工系では9割、人文社会系では5割が研究職・技術職に就いていることが示されており、進路の多様性が十分に確保されているとはいいがたい。

一方、日本の大学の博士課程に在籍する留学生の状況は大きく変わってきている。図1に日本の博士課程学生数とそこに含まれる留学生数の推移を示したが、この図から分かるように留学生を除く博士学生はこの10年減少傾向にある一方、博士留学生は新型コロナウイルス感染症のため留学生の総数が大幅に減少した時期においても、一貫して増加しており、博士課程学生数の維持を下支えする存在となっている。

さらに博士留学生の増加と軌を一にして、博士修了後に日本に就職する

留学生の割合も増加してきている。文部科学省（2022）では留学生の国内就職促進のための様々な活動がまとめられており、本報告で扱うプログラムが実施されている北海道大学も文部科学省の「留学生就職促進プログラム」に選定されている。それら多くの取り組みとの関連については詳細な調査が必要であるが、実際、図2で示したように令和元年（2019）からは博士修了後に日本での就職を予定している学生は5割を超えるようになってきている。

また、日本学生支援機構（2022）の2021年の調査によると、私費留学生に限るが、博士留学生の6割以上が日本での就職を希望している。そのため、図2のデータを考慮すると、現在、日本での就職希望者の多くが実際に日本での雇用を得ていることが推測される。

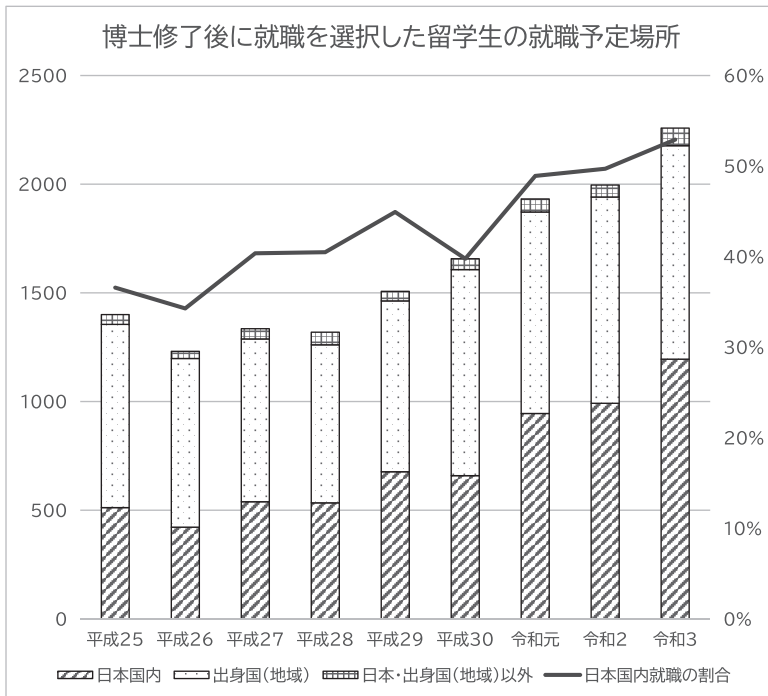


図2 博士課程修了後に就職を選択した留学生の就職予定場所
 (日本学生支援機構『外国人留学生進路状況・学位授与状況調査』平成25年度－令和3年度を加工して作成)

以上より、博士課程学生のキャリアパス多様化には、博士留学生の日本

就職の影響も大きいことが分かる。そのため、博士留学生の動向は今後の日本の大学の博士取得者が様々な職業を選ぶようになる呼び水となることも期待できるだろう。

一方、博士留学生の日本就職については課題もある。教育未来創造会議（2023）に「日本企業に就職ができて短期間で帰国を余儀なくされたりする場合があります、外国人留学生の卒業後の定着や活躍に向けた環境整備は十分とは言えない状況にある」とあるように、高度外国人材の日本定着率向上の一環として博士留学生の就職をとらえると、十分な対策がなされているとは言いがたい。

以上に挙げたような博士留学生の就職促進、そして就職後の日本定着率向上に対して大学が寄与できる取り組みは多く考えられるが、就職後は日本での生活が想定される以上、日本語学習支援の重要性は高いとみなしてよいだろう。飯田（2016）は、英語のみを使用して研究を行う博士留学生が日本就職のために日本語習得を希望する場合は、「日々の研究時間を工夫し、毎日少しずつ時間をかけて自習していくことが必要である」と述べている。次章ではそのような日々自習時間を捻出しなければならない博士留学生にとっての北海道大学における日本語学習の環境と本報告のテーマである「基礎日本語能力開発プログラム」の必要性について述べる。

2. 対面を基本とする「一般日本語コース」と博士留学生の学習支援

北海道大学で現在実施されている「一般日本語コース」は日本語学習のための環境を十二分に提供しているため、基本的には日本語学習が必要な学生はそのコースを受講することになる。しかし、「一般日本語コース」は学習効果や学生のニーズを考慮して、授業形態は原則対面であり、初級科目の一部にオンラインの科目はあるが、リアルタイムの受講が必要である。また、「一般日本語コース」は通常の開講時間、すなわち8時45分から18時までの間に開講されているため、日中に受講のための時間を確保できなければ受講は不可能である。

一方、博士留学生は自身の研究テーマや所属研究室によっては、日中に研究活動以外の時間を確保するのが難しいこともしばしばある。2019年度から2022年度までに「一般日本語コース」を受講した博士留学生は学期毎におよそ50から100名ほどになり、受講科目は述べ100科目ほどであるが、学期途中での受講キャンセルがおおむね4割程度、学期によっては6割に

までいたる。このキャンセル率の高さの要因としては博士留学生にとっての「一般日本語コース」が単位を取得できない科目であることも考えられるが、やはり研究活動の多忙さが無視できない要因であろう。

そのような博士留学生に対し、日本語学習を支援するプログラムとして始められたのが「基礎日本語能力開発プログラム」である。

3. 「基礎日本語能力開発プログラム」(Basic Japanese Development Program) の概要と取り組み内容

この章では実際のプログラムの概要と取り組み内容について記す。

3.1 プログラムの目的

第2章で述べたように、博士留学生は日本語学習の時間を確保する上でいくつかの困難を抱えていることが多い。一方、深川他(2017)において金沢大学の調査に基づいて指摘されているように、理工系(医学系も含む)の大学院に所属する留学生は、研究面では英語のみで十分とされているにもかかわらず、日常生活、学内・研究室でのコミュニケーションなど様々な必要性から日本語学習を求めている状況がある。そういった博士留学生のニーズに応えるための方策の一つとして、より継続しやすい日本語学習環境の整備が挙げられる。

そのような課題に対応して企画された本プログラムは国内の各種教育機関が開発した自習教材やオンデマンド教材を学生の日本語レベルに合わせて紹介し、その学習の過程をプログラム側で把握し、学習に関して適切な助言や質問対応をすることを主たる内容としている。また、それに加えて、主に学習動機を維持するための取り組みも企画された。具体的には日本人学生との交流会、ビデオ通話によるスタッフとの定期的な面談、オンライン／対面の学習会などである。

3.2 プログラム実施概要

本報告までに2期に渡ってプログラムを実施した。各期の概要は下記の通りである。まず、第1期目となる2022年度春期は2022年10月13日から2023年3月17日までを実施期間とした。この期間のプログラム対象者は北海道大学が実施しているDX博士人材フェローシップの支援を受けている博士留学生に限った。その理由は、初めてのプログラムのため参加人数が

予想できず、準備したスタッフ数で十分対応できるように参加人数を抑制するためであった。登録した博士留学生は39名である。スタッフは責任者として日本語教育部門の教員が1名、スタッフとして日本語教育科目担当経験者を2名配置した。

第2期となる2023年度春期は2023年5月17日から9月30日の期間で実施した。第2期は対象者を在籍する博士留学生全体に広げた結果、81名が登録した。2023年春期における博士留学生数はおよそ400人強である¹⁾ため、全体の20%程度が登録したものと推測される。

3.3 プログラム開始時の説明会

各期ともプログラム開始時に説明会を実施した。実施形式は対面とオンラインの併用である。説明会では、日本語学習によって得られることとして、「自身の研究紹介ができる」「企業との面接などで適切にコミュニケーションがとれる」「就職エントリーや日本国内の学会参加に必要な情報が得られる」の3点を中心に説明した。その後、北海道大学人材育成本部所属の教員から、博士課程修了後に日本でキャリアを継続する場合の日本語の必要性について、より具体的な説明を行った。

プログラム全体の説明の後、個々の受講生の状況に応じた適切なレベル設定や目的に応じた学習内容の選択など、効果的な日本語学習について説明を加えた。最後にプログラムの具体的な利用方法や、予定されている日本人学生との交流会について情報を提供した。

3.4 ニーズ調査の実施

適切な教材や学習内容を紹介するため、プログラム登録者に対して、自身の日本語レベルと学習したいことを自己申告するよう依頼した。その結果を表1に示す。表1の左に示したのは、登録者の日本語レベルである。プログラム開始前の想定では、登録者の大部分が、日本語習得の必要性を感じつつも、多忙を理由として一般日本語コースの授業受講をあきらめた学生となるであろうと考えていた。そのため、受講者の日本語レベルはゼロレベルあるいは初級レベルが多くなると予想していた。しかし、実際にはゼロ・初級レベルだけではなく、中級レベルの登録者も一定数いた。これは、既に日本語学習の必要性を認識し、入学前あるいは入学後に何らかの形で学習を行っており、なおかつ独習による学習の限界を感じている博

士留学生が相当数いることを示している。

表1 「基礎日本語能力開発プログラム」登録者ニーズ調査結果

レ ベ ル	人 数		目 的	人 数	
	22秋	23春		22秋	23春
Zero	10	22	口頭表現	10	63
Introductory	13	38	文法	13	10
Intermediate	6	20	漢字／語彙	6	5
Business	1	1	ビジネス／アカデミック	2	2
回答なし	9	0	文章作成		
計	39	81	その他	0	1
			計	39	81

一方、表1の右に示した日本語学習の目的は2023年度春期の調査で顕著のように口頭表現の習得に偏っている。「一般日本語コース」の授業を受講するのが難しい博士留学生にとって、優先順位が高い日本語スキルは口頭でのコミュニケーションであることがわかる。

また、上記ニーズ調査とは異なるが、プログラム内の面談で受講生から聞き取った日本語学習に関するコメントも紹介する。

ゼロレベル

「一般日本語コースの初級クラスを受講していたが、研究との兼ね合いのため、途中でキャンセルした。日曜日しか日本語の勉強にあてる時間がないが、文字学習（ひらがな・カタカナ）から始めたいと思っている。文字を読む課題を出して欲しい」

初級レベル

「過去に一般日本語コースの初級文法と初級口頭表現を受講したことがある。簡単な表現は少し理解できるが、全く話すことができないのが悩み。スピーキング練習の機会、他の参加者や日本人と交流する場が欲しい。研究が忙しく、学習時間があまり取れないので、課題は進められるか分からない」

中級レベル

「日本人と交流する機会がある、というのがプログラム参加の動機。

論文は英語で書くが、研究室の日本人とは日本語で話している。オンライン面談も活用できるといいが、研究で実験が多く、面談の予約をしても実際に来られるかどうかの見通しが立ちにくい」

3.5 紹介した教材

表1で示したレベルを基準として教材や学習プログラムを受講者に紹介した。選定の基準としては課題の進捗が明確に表示され、進捗状況を学生から報告された際、プログラムのスタッフからも把握しやすいことを考慮した。また、レベルはあくまでも自己申告であるため、各レベルとも実際の能力には大きな幅があることが想定された。そのため、紹介する教材については、開始後に学習内容を調整することを前提として、おおまかなレベルごとに教材を指定した。使用した教材は下記のとおりである。プログラムの開始後は、面談とメールで個別に細かな学習レベルや学習したいことをさらに詳しく調査し、実際に取り組む内容を決めていった。

- ・ゼロ：ひらがな／漢字教材（スタッフ作成）
- ・ゼロ：国際交流基金関西国際センター「まるごと+（まるごとプラス）」(<https://marugotoweb.jp/ja/>)
- ・初級：筑波大学「日本語 123」（初級）(<https://nihongo123.cegloc.tsukuba.ac.jp>)
- ・中級：筑波大学「日本語 123」（中級）(<https://nihongo123.cegloc.tsukuba.ac.jp>)
- ・ビジネス：東洋大学「オンライン日本語講座」（有料）(<https://toyo-jlp.com>)
- ・日本語能力試験（JLPT）対策講座

レベルごとに指定した既存教材の特徴を簡単に示す。ゼロレベルに配置した「まるごと+」は国際交流基金関西国際センターが作成した「Can-Do」の達成を第一目的とした教材である。そのなかでも「入門（A1）」の課は、漢字を使わず、様々な状況での日本語会話を学習できるようになっている。本プログラムで受け入れるゼロレベルの博士留学生は、まずは日常の用途を基本とした口頭表現を必要としているため、「まるごと+」が適当と考えた。

次に筑波大学が開発した「日本語123」は文法解説とパターンプラクティスによる練習がコンパクトにまとまっており、文法学習を途中まででも行ったことがある、あるいは一通り学習したことがある受講生の文法知識定着に有用と考え初級と中級に配置した。

最後に、東洋大学が開発し運営している「オンライン日本語講座」の中から「ビジネス日本語入門（オンデマンド）」を上級レベルでアカデミックを含む日本での就職を検討している受講生に紹介した。この講座は有料であるが、ビジネスに用いる日本語に加え、ビジネスマナーや文化など日本就職で必要となるスキルを得ることができるため、日本でキャリアを築く計画を持つ受講生にとって大変有用である。

また、中級レベル以上の学生からはJLPT対策講座の需要も大きく、個々の受講生の希望に応じて1対1の講座を5名の希望者に対し、8-10回実施した。

3.6 学習継続の支援

プログラムの開発当初はMoodleやGoogle ClassroomといったLMS（学習支援システム）を用いて、課題の進捗確認や相談窓口の設置、個別のオンラインあるいは対面の面談による学習相談を設けた。しかし、LMSやメールのような非同期的な連絡手段では、やりとりに長い時間を要することが多かった。これは、日本語学習に多くの時間を割くことのできない博士留学生にとって、優先順位が必ずしも高くない日本語学習関連の連絡への対応が遅れがちになるためであると思われる。しかし、自身の学習の進捗状況の連絡をしないままにしていたり、提出課題へのフィードバックが来ても、それを確認しないままにいたりしていると、学習意欲の継続は困難になってしまう。本プログラムの実施中も、学習が途中で止まってしまう、連絡が途絶えてしまうようなケースが見られた。

そこで、受講生との主要なやりとり手段をビデオ会議と対面による面談に切り替え、内容も会話練習とJLPT対策を中心とした。そして、オンデマンド教材は個々の受講生が苦手とする内容を補強するために適宜指示する形式をとった。すでに3.4において面談で聞き取った情報については紹介しているが、そのような面談を実施した結果、受講生が必要とするスキルや日本語学習における課題について、細やかに把握することが可能になった。

それぞれの聞き取り内容からは、日本語学習の意欲はあるものの学習時間の確保が困難なことが確認できる。このような多忙な受講生が日本語学習を継続するためには、それぞれの状況に応じた学習計画を立てる必要があるため、その観点からも面談の実施は重要である。

3.7 日本人学生との交流会

本プログラムでは日本人学生との交流会を複数回実施した。その理由は大きく2つある。1つ目は日本語による会話機会の提供である。本プログラム登録時のニーズ調査や長谷川（2022）の調査結果にもあるように、博士留学生の多様な日本語スキルのニーズの中でも、もっとも多いのが口頭によるコミュニケーションであった。主に英語で行われる研究室内のコミュニケーションや、会話内容の広がりに限られる買い物などのコミュニケーションではなく、多様な話題について、一定の長さの時間、会話できる機会を提供するために、交流会を実施した。

表2 「基礎日本語能力開発プログラム」交流会概要

回	2022秋期		2023春期	
	人数	内容	人数	内容
1	留学生3名 日本人学生2名	博士留学生の研究内容紹介	留学生9名 日本人学生10名	会話練習 研究紹介
2	留学生3名 日本人学生3名	研究内容紹介 話題を指定した会話練習	留学生16名 日本人学生8名	会話練習 研究紹介
3	留学生11名 日本人学生10名	フリートークを中心としたグループ活動	留学生17名 日本人学生23名	GAME NIGHT テーブルゲームやボードゲームを通じて交流を深める

2つ目の理由は日本語学習者同士のコミュニティの形成である。対面授業である一般日本語コースを受講する学生は、教室に来ることにより、受講者同士の交流が発生しやすく、日本語学習に関する様々な話題の共有をしやすい環境にある。交流会では、受講者間の交流に加え、日本人学生との交流機会も増やすことにより、学習意欲が刺激されることを企図した。

表2は実施概要、図3、図4、図5は実施時に撮影した写真である。日

本人学生は学部1年生から大学院生まで学部や院の所属によらず、ポスターやメールで広く協力を募った。

交流会後のアンケートは留学生と日本人学生の両者を対象とした。博士留学生からは「おもしろい交流会で、とても楽しめた」、日本人学生からは「世界から見た北大の盛んな研究を新たに見つけることができた」「(GAME NIGHTの交流会では、ゲームの)説明をその場で行うことがコミュニケーションを取るきっかけになって話しやすかった。ゲームというきっかけはとても良いものだと思う」などのコメントが得られており、すべての交流会で「再び参加したい」との回答が100%であった。この高い評価の要因として考えられるのは、研究活動が多くを占める博士留学生の生活では、日本語で積極的に話す機会が得にくいいため、この交流会で研究室や専門分野以外の日本人学生と日本語で話す機会が得られたことがあげられるだろう。

加えて、日本人学生からのよい評価の背景としては、留学生と英語で交流する企画は一定数実施されているが、専門あるいは研究室配属前の学部1年生や2年生にとって、授業外において日本語で留学生と交流する企画はあまり多くないことがある。また、専門/研究室配属後であっても、分野や研究室によっては留学生との交流がほほないことも考えられる。そのため、日本人学生から得られた改善を求めるコメントとして、「まだまだ話し足りなかったので、もっと時間が長くてもいいのではないか」などがあり、日本人学生からも留学生と日本語で話す機会が望まれていることがわかる。



図3 日本人学生との交流会「博士留学生と日本語で話そう」(2022年5月)



図4 日本人学生との交流会
「GAME NIGHT」(2023年7月) ①



図5 日本人学生との交流会
「GAME NIGHT」(2023年7月) ②

これら日本人学生からのアンケート結果を踏まえると、留学生だけではなく、日本人学生にとっての教育効果も交流会の機能と考え、企画内容を精査し、組み立てていく必要があるだろう。

4. 学習の継続につなげるために

本プログラムを2022年度秋期と2023年度春期の2期実施したことにより、より効果的なプログラムとするための課題が見えてきている。まず、オンデマンド教材のみで、学習を継続できた受講生はほとんど見られなかった。一方、オンライン面談において、日本語能力試験(JLPT)対策を含め、受講生自身が必要と考える内容の学習を希望する受講生の多くは定期的な学習の継続を達成できた。その理由としては、本プログラムの受講生は日本語レベルと必要な学習内容が多様であり、既存の教材を紹介するだけでは対応しきれないことがまず考えられる。

また、受講生は研究活動で多忙な中、単独で日本語学習を進めることに不安を抱いているからこそ、本プログラムに参加したと思われるため、プログラムのスタッフや日本人学生、他の学習者とのコミュニケーションが学習継続のために重要であると考えられる。特に、学内における活動の大部分で英語を使用している受講生の場合、日本語で多様な話題を話す機会が限られるため、面談と交流会の実施の重要性が高くなる。

受講生へのアンケート調査では、プログラムの内容自体への不満は見られず、オンライン面談の夜間や休日への時間拡大、交流会など実際に会話できる活動の拡充を求める声が多かった。そのため、今後は交流会の実施を基本とした上で、その中で受講生による発表などアウトプットする機会を増やし、その準備をスタッフが補助することにより、各人にとって必要なスキルを把握し、適切な学習内容を助言する体制を築くことを考えている。

5. まとめ

現在、日本の大学では日本語のニーズもレベルも多様な留学生が増え続けており、大学に求められる日本語教育も多様化している。特に博士留学生については、研究活動を主目的として在籍しているため、個々の事情や想定しているキャリアパスによって、必要とされる日本語能力が大きく異なる場合が多い。そのため、大学が提供できる日本語学習の機会として、対面あるいはオンラインの形式で授業として開講される日本語学習の機会が重要なことは言うまでも無いが、多忙な博士留学生でも受講できるような学習機会充実の検討は重要であろう。

本プログラムはそのような学習機会提供の1つとして立ち上げたものである。プログラムを実施する中で、博士留学生の置かれている状況やニーズについて、当初の想定とは異なることも多く判明した。具体的には、受講生の日本語レベルが多様であること、オンデマンド学習の継続にはオンラインなどによるリアルタイムの面談との併用が重要なこと、交流会などで実際に日本語を使用する機会を求める受講生が非常に多いことなどである。プログラム実施により得られたこれらの知見を活用し、「多忙な博士留学生でも個々のニーズに応じた日本語学習が継続できる」という目的が達成できるよう、プログラムの改善が今後も求められる。

注：

- 1) 北海道大学の公開情報である入学者数より推定。

参考文献：

飯田良親（2016）「外国人博士課程留学生と企業とのマッチング」『産学官連携ジャーナル』2016年12月号 pp.4-6

- 教育未来創造会議（2023）『未来を創造する若者の留学促進イニシアティブ（第二次提言）』（<https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kyouikumirai/pdf/230427honbun.pdf>）（2023-9-25閲覧）
- 日本学生支援機構（2013-2021）『外国人留学生進路状況・学位授与状況調査』平成25年度－令和3年度（<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/shinro-and-gakui/>）（2023-9-25閲覧）※令和3年度からは『外国人留学生進路状況』に変更
- 日本学生支援機構（2022）『令和3年度私費外国人留学生生活実態調査概要』（<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/seikatsu/data/2021.html>）（2023-9-25閲覧）
- 長谷川由香（2022）「理工系留学生にとっての日本語使用上の困難点と学習ニーズ－アンケート結果から－」『多文化社会と言語教育』vol.2, pp.39-47
- 深川美帆・高島智美（2017）「理工系大学院留学生を対象とした日本語教育のニーズとコースデザイン」『金沢大学留学生センター紀要』vol.21, pp.15-27
- 文部科学省（2013-2022）『学校基本調査』平成25年度－令和4年度「政府統計の総合窓口(e-Stat)」(<https://www.e-stat.go.jp/>)（2023-9-25閲覧）
- 文部科学省（2019）「2040年を見据えた大学院教育のあるべき姿 ～社会を先導する人材の育成に向けた体質改善の方策～（審議まとめ）（本文）」(https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2019/02/18/1412981_001r.pdf)（2023-9-25閲覧）
- 文部科学省（2022）『外国人留学生の就職促進について』（https://www.jasso.go.jp/gakusei/career/event/guidance/_icsFiles/afieldfile/2022/06/14/1mnka_gakuryu.pdf）（2023-9-25閲覧）

やまはた ともゆき

（北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部講師）

On-demand Japanese Language Courses for International Ph.D.
Students “Basic Japanese Development Program” (BJDP)
– Background and Report on the Program –

YAMAHATA, Tomoyuki

This study reports on implementing an on-demand Japanese language course based on the “Basic Japanese Development Program” (BJDP) from October 2022 to 2023. The Basic Japanese Development Program is a Japanese language learning program for international Ph.D. students at Hokkaido University. However, Hokkaido University already offers a “General Japanese Language Course” that all international students enrolled in the university are eligible to take. However, the “General Japanese Language Course” is offered two to three times a week during the regular class hours of 8:45 a.m. to 6:00 p.m., and the classes are held in person or online in real time. Therefore, some students who do not have enough time to attend classes during the daytime, especially Ph.D. students who spend most of their time in the laboratory, cannot take the “General Japanese Course”. This program aims to provide Ph.D. students with learning assistance centered on on-demand materials. This paper reports on the background of the establishment of the course, the actual activities of the course, and the reactions to the program from participants and Japanese collaborators.